

季刊

2003年 秋号 / 第4号

海堡

Kaihou

東京湾海堡ファンクラブニュース

No.4

編集・発行 / 東京湾海堡ファンクラブ
会長 高橋在久

発行日 / 2003年 12月 1日

題字は、明治 39 年 10 月 1 日陸軍大臣寺田正毅から外務大臣林董宛に提出した文書（外交史料館所蔵）より抜粋。
紋様は、尾形光琳：『八橋時絵硯箱』東京国立博物館所蔵より。

目次

- 第 2 回シンポジウム開催報告
 - ・「東京湾防衛史序説」筑紫敏夫
 - ・「景観資産としての東京湾海堡」岡田昌彰
- 第二海堡見学会報告
- 海堡写真館
- 「西田明則君之碑」説明板除幕式
- 東京湾海堡シンポジウム開催案内
- 会則 / コラム / 入会案内

東京湾防衛史序説

- 江戸時代の沿岸防備 -

千葉県中央博物館 資料管理研究科長 筑紫敏夫



講演する筑紫氏（2003.6.21 撮影）

第 2 回海堡シンポジウム開催報告

第 2 回海堡シンポジウムが 2003 年 6 月 21 日、富津公民館で開催されました。



第 2 回海堡シンポジウム（2003.6.21 撮影）

〔講師・内容〕

筑紫敏夫氏「東京湾防衛史序説」

岡田昌彰氏「景観資産としての東京湾海堡」

〔司会〕高橋在久会長

はじめに

江戸時代の東京湾（以下、江戸湾と呼称）の防備に関する研究は、戦前は「国土防衛」「帝都防衛」の前史を探るといふ軍事史的研究が主流であった。戦後になると、1960年前後から、明治維新の位置をめぐる議論の中で江戸湾防備が論じられたり、また幕藩制国家の対外的機能論で論じられたりもした。近年では、江戸湾の防備態勢が敷かれた沿岸地域の村々の視点から、地域社会論として研究が進展しつつある。

1. 江戸湾防備態勢の移り変わり

江戸湾防備問題が最初に幕政の関心事となるのは、ロシア船の来航が頻繁になった寛政改革の頃からである。老中松平定信が中心になって、防備計画を推進するが、程なく老中を解任された。次の文化期では「寛政の遺老」と言われる幕閣の指導者たちによって、より深刻になっていたロシア船問

題に対処するために、江戸湾岸に白河藩と会津藩が配置され、初めて大名への「委任」という形の防備が実現をみた。文政年間になると、両藩は、防備を解任され、浦賀奉行と幕府代官が主導して、近隣の諸藩が台場に援兵を派遣する体制となり、二十年ほど続いた。

天保改革の中で、老中水野忠邦は、アヘン戦争で清国がイギリスに敗北したという極秘情報を得て、国内での混乱を恐れて、政策意図を隠したまま、「五か条の新政」を断行しようとして、失脚した。江戸湾防備の大名委任は、新政の一つとして、実現をみて、忍・川越両藩が防備についた。次の弘化年間には、会津・彦根両藩が加わって、「御固四家」の態勢に強化された。

1853年には、ペリーが軍艦を引き連れて来航し、開国を求めた。翌年の再来航に備えて、外様の大藩四家に江戸湾防備を命ずるが、予想より早くペリーが再来航したために、四藩の家臣は、着任していなかった。そして、和親条約、修好通商条約が締結されると、江戸湾防備の位置は相対的に低くなり、政局の中心は京都・大坂に傾いてゆき、大阪湾の防備の比重が増したのである。

2．沿岸地域の農民支配と防備への動員

沿岸地域の農民には、通常の年貢・諸役に加えて、次のような防備にかかわる負担が課せられた。

(1) 駆け付け人足

15, 6才から60才までの男子全員が対象で、異国船来航時に、半鐘を合図にあらかじめ指定された台場や陣屋に急いで駆け付けて、雑用をこなす。

(2) 水主(かこ)・役船

村にある五大力船・押送船・漁船などすべてが対象で、水主(船の乗組員)とともに、異国船来航時には、指定された台場下の海域に急行して、物資の海上輸送や、藩の役人を乗せて異国船への監視・偵察行動をする。

(3) 普請人足

台場・陣屋の新增設の時に土木作業をする。

(4) 異国船発見の注進

陸上から、また操業中に海上で、異国船を発見したならば、何をおいても陣屋・台場に知らせに急行する。怠った場合は処罰の対象となった。

(5) 休憩や宿泊費用

幕府役人や大名(及び家臣)の防備施設見分の時には、休憩・宿泊の賄いを村々で行い、掛かった費用もすべて村々で出す。

3．庶民の異国船認識

二度のペリー来航の時期に、広範囲に流布した瓦版をもとに、異国船を庶民がどのように見たのかを考えてみた。最初の来航直後の瓦版は、日本は神国だから平気、というような楽観的な様子であった。しかし、二度目の来航直後には、庶民は第三者的なとらえ方に代わってきており、対策にあわてる幕藩領主を風刺的にとらえていた。

また、黒船見物を禁止する町触が何度も出されており、禁止が守られていないことがわかる。黒船見物の格好のポイントとなった大森海岸では、大勢の見物客目当てに臨時の茶店が建ち並び、逆に江戸市中の芝居小屋は閑古鳥が鳴いていたという。

おわりに

江戸湾防備問題を沿岸地域の村々から見ると、例えて言えば、現在の有事法態勢の江戸時代版ということになる。現在の東京湾岸には、沖縄県ほどの密度はないにしても、日米の軍事施設が数多く配置されている。サミット参加国の中で、首都に他国の基地があるのは日本だけである。そんなことを念頭に置きながら、江戸時代の湾岸の防備を振り返ってみるのも意義あることであろう。

以上

景観資産としての東京湾海堡

近畿大学理工学部社会環境工学科講師 岡田昌彰



講演する岡田氏(2003.6.21撮影)

今回の講演では、東京湾海堡の現在のすがたそのものに価値を見出すことを目標に、美学や既存の景観論と照らし合わ

せながら、現景観の新しい可能性について議論しました。

軍事建築、軍事土木構造物、砲台・弾着観測所など、戦前の軍事施設にはたいへん豪華絢爛で特徴的なものがあります。新聞記事にてご覧頂きましたように、近年は近代化遺産として戦跡の存在価値を再評価しようという動きも見られます。いっぽうで、写真集や画集など芸術界にてもトーチカや掩体壕などが「不思議な衝撃波」をもつ興味深い構造物として注目されています。

東京湾海堡は、関東大震災被災などを経て、現在は崩壊した施設群が散在する状況にあります。備砲は主として「隠頭式構造物」と「露天・砲塔砲台」の2種類に大別されますが、探照燈や隠頭砲架式砲台など前者の設置されていた地区では、鉛直秩序をもつ構造物が目立って崩壊しています。

次に、既往研究の「産業廃墟景観論」を援用し、現景観の固有性について考察しました。価値ある“廃墟景観”としての評価枠組みとなる「アイキャッチャー」「自然(じねん)」「尚古象徴」「うつろい」の4項目に着目し、東京湾口周辺域に現存する戦跡との比較検討を行いました。その結果、

- (1)機関舎煙突や装甲版付砲塔など突出した構造物が海堡内各域に点在しており、風景全体において「アイキャッチャー」となる可能性がある点、
- (2)各施設の風化が著しく、自然摂理がつくりあげた「じねん景観」が生じている点、
- (3)煉瓦や石材などアンティークな構造材料が非常に多く、「尚古象徴」としての可能性をもつ点、
- (4)高さ3~5m前後の隠頭式構造物が崩壊状態にあり、顕著な「うつろい景観」となる可能性がある点が指摘できました。

このほかに歴史性や回遊性、眺望など、“楽しめる海堡”としての観点はいくつかあると思いますが、このような“廃墟景観”としての個性も海堡景観の重要な価値の一つであると考えられます。

以上



質問に答える岡田氏(左)と筑紫氏(中央)、右は高橋会長
(2003.6.21撮影)



第一海堡
(岡田昌彰撮影)



第一海堡
(岡田昌彰撮影)



第二海堡
(岡田昌彰撮影)



第二海堡
(岡田昌彰撮影)

第二海堡見学会報告

第二海堡見学会を下記日程で実施しました。見学会の希望者が多く、定員 40 名満員になりました。

記

日時：平成 15 年 9 月 12 日（金）10:00～13:00

集合場所：富津公民館、東京湾口航路事務所

講師：ファンクラブ幹事 朝倉光夫氏

東亜建設工業 山本典文氏

参加費：1,000 円（傷害保険、資料代）

9 月 13 日（土）も開催を予定しておりましたが、あいにく台風の影響で風が強く、中止となってしまいました。お申込みいただいた皆さま、次回の企画までお待ちください。



2003.9.12 撮影



2003.9.12 撮影



2003.9.12 撮影

海堡写真館

永島庄兵衛

第 3 号の「コラム」で紹介した永島庄兵衛です。永島庄兵衛は東京湾海堡建設に携わった施工業者です。詳しくは、第 3 号をご覧ください。



（横須賀市蔵）

永島家の赤門



赤門は、横須賀市の文化財に指定されています。今は、永島家の屋敷はなく、赤く塗られた門だけが残っています。（2001.11.27 撮影）

永島家文書



永島家文書には、東京湾海堡で働いていた労働者の名前や賃金が書かれている「支払帳」のほか、出勤簿にあたる「出面帳」、陸軍との契約書などがあります。

（横須賀市蔵）

ニュース

衣笠公園「西田明則君之碑」説明板が設置されました。 - 11月20日(木)除幕式 -



完成した碑の説明板

碑の入口に設置した案内板
説明板、案内板とも、台座
には第三海堡のレンガを
使用している。



横須賀市衣笠山公園にある「西田明則君之碑」の説明板が国土交通省・東京湾口航路事務所によって設置され、2003年11月20日(木)除幕式が行われました。

除幕式には、西田明則の子孫代表として、西田好孝副会長、おさか小坂丈予氏、横須賀市役所、東京湾口航路事務所関係者が出席しました。

【式典での西田好孝副会長のあいさつ】

本日は除幕式にお招きいただきまして、誠にありがとうございました。

大勢の方のご来臨をいただき重ねて御礼申し上げます。

私は西田 明則の曾孫でございます。

小学校5年生まで市内の大津小学校に在学しておりました。春・秋のお彼岸には両親に連れられて海の見える「しんばか」にお参りしたあと、衣笠山に登り「碑」に手を合わせ、その後海を見ながら「おにぎり」を食べた記憶が鮮明に残っています。

私は10年位前第一線を退き手が空いてきたとき祖先のことを種々調べている内にどうしても、西田明則のことが気になり、横須賀市の郷土史家の先生方や出身の岩国吉川藩の事務所をお尋ねして情報をいただき、「家系譜」としてまとめていました。こちらにも何度か足を運びました。

「碑」は、松井庫之助陸軍中將により発起され、十三宮家ほか651人のご賛同を得て建立されたもので「碑文」については陸軍工兵を興した上原勇作元帥陸軍大将の撰文によるものです。

しかし、「碑文」に書かれている文章が難解で意味が汲み取れませんでした。

加えて銅版が腐食しつつあり、後世に伝えて行きたいとの思いから説明板の設置を考え漢文の先生方にお願いし、現代文に訳していただきました。

設置については現在編集集中の「第三海堡建設史」のなかでその偉業についてご理解が深まり今日の日につながったものと思ひ感激いたしております。

その間、国土交通省 東京湾口航路事務所の初代所長・朝倉様、現在の小野寺所長様そして、横須賀市の関係者の皆様には大変ご尽力をいただきました。

一族を代表しまして厚く御礼申し上げご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。



西田明則の子孫らによる除幕式(2003.11.20撮影)



挨拶する西田好孝副会長(右)と小坂丈予氏(中央)

東京湾海堡シンポジウムの開催

高橋在久会長、岡田昌彰氏がパネリストとして話をされます。

ペリー来航 150 周年記念 東京湾海堡シンポジウム 『明治 大ロマン 第三海堡のフロンティア精神』

日 時：平成 15 年 12 月 13 日（土）13 時～17 時

場 所：横須賀芸術劇場（大ホール）

京急汐入駅・JR 横須賀駅下車

主 催：国土交通省 東京湾口航路事務所

共 催：横須賀市

概要

国土交通省東京湾口航路事務所が、12 月 13 日（土）、横須賀芸術劇場にてシンポジウムを開催します。今回のシンポジウムは、地元・横須賀市との共催で開催するもので、『ペリー来航 150 周年記念』のイベントのひとつです。

東京湾海堡建設の歴史の紹介を中心に、シンポジウムは次の四つで構成されています。

歴史作家の津本陽氏の記念講演

映像による第三海堡の紹介

軍事・郷土史の専門家による講演

軍事・郷土史・景観・建設技術・東京湾学の専門家によるパネルディスカッション

内容

記念講演 作家 津本 陽氏

戦国時代から明治にかけての“日本人の精神のあり方の変化”をテーマに話をさせていただきます。

映 像 「東京湾第三海堡」

講 演 原 剛氏（防衛研究所戦史部調査員）

〔東京湾海堡の建設経緯〕

高村聡史氏（横須賀市市史編纂室）

〔東京湾海堡をめぐる日米関係 - 技術供与の側面から - 〕

パネルディスカッション

テーマ：『東京湾口から発信する過去と未来』

コーディネーター

森野美徳（（社）日本経済研究センター）

パネリストと話題提供

高橋在久（東京湾学会理事長）

〔東京湾学からみた海堡〕

小野寺駿一（（社）日本港湾協会副会長）

〔海洋港湾技術からみた海堡〕

岡田昌彰（近畿大学講師）

〔景観資産としての海堡〕

上田 寛（（財）国際臨海開発研究センター）

〔第三海堡撤去にいたる経緯〕

原 剛（防衛研究所戦史部調査員）

〔東京湾防衛史からみた海堡〕

高村聡史（横須賀市市史編纂室）

〔横須賀の郷土史からみた海堡建設

- 『永島家文書』を中心に - 〕

参加費：無料

定 員：600 名

参加申込：

〔ファクシミリの場合〕

「氏名」「住所」「職業」「性別」「FAX」「TEL」および 12/13 シンポジウム参加希望と明記し、FAX.03-5443-5412 にファクシミリを送付。

〔葉書の場合〕

〒108-0022 港区海岸 3-26-1 パーク芝浦 6 階（財）港湾空間高度化環境研究センター 大島宛に葉書を送付。

詳しくは、

国土交通省東京湾口航路事務所ホームページ
<http://www.pa.ktr.mlit.go.jp/wankou/>

あるいは、（財）港湾空間高度化環境研究センターホームページ
<http://www.wave.or.jp/>

電話の場合は、

（財）港湾空間高度化環境研究センター大島・和田まで。

（Tel.03-5443-5386）あるいは、

（株）地域開発研究所 高橋悦子まで。（Tel.03-3831-2916）

申込締切：12 月 9 日

〔記念品情報〕

参加者全員に、写真集『漣 - 変わりゆく東京湾』をプレゼント。資料として活用できますので、是非、この機会に入手してください。

皆さま、誘い合わせのうえ、ふるってご参加ください。

チラシ、ポスターが必要な方は、（株）地域開発研究所 高橋悦子までご連絡ください。

東京湾海堡ファンクラブ会則

第1条 (名称)

当会の名称は、「東京湾海堡(とうきょうわんかいほう)ファンクラブ」とする。

第2条 (目的)

当会は、東京湾海堡を核にして人の輪をつくり、東京湾海堡の歴史の検証と普及、遺跡の整備と愛護、ランドマークとしての理解を深め、東京湾の歴史と未来をつなぐことを目的とする。

第3条 (事業)

当会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 東京湾海堡に関する研究会、講演会、見学視察会の実施。
- (2) 会報の発行(年4回)
- (3) 東京湾海堡に関する資料・情報の収集。
- (4) その他、東京湾海堡への理解と愛護を深める活動。

第4条 (会員)

当会の目的、事業に賛同する個人または法人(グループを含む)を会員とする。

第5条 (入退会と会費)

当会に入会しようとするものは、入会申込書により会長に申込みものとする。会長は、正当な理由がない限り、その入会を認めなければならない。当会を退会しようとするものは、退会届けを会長に提出し、任意に退会することができる。

会員は、下記の年間会費を納入する。

年間会費は、個人会員2,000円、法人会員10,000円とする。

会費は、毎年4月に支払うものとし、会費を支払わないときは退会したものとみなす。

既納の会費は、いかなる理由があっても返還しない。

第6条 (総会)

総会は、当会の議決機関であり、年1回の通常総会および臨時総会とする。

- (1) 総会は、会員をもって構成する。
- (2) 総会は、会員の過半数を定足数とする。ただし、定足数については委任状をもって代えることができる。
- (3) 総会の議決は、出席した会員の過半数の賛同をもって行う。可否同数の場合は、議長の決するところによる。
- (4) 会長は総会を召集し、総会の議長を勤める。
- (5) 総会は、前年度の事業報告および収支決算の承認、当年度の事業計画および収支予算の決定、役員を選任、会則の変更、解散、合併、その他総会または役員会が必要と認める事項について議決を行う。

第7条 (会員の権利)

会員は、次の権利を有する。

- (1) 総会に参加すること。
- (2) 研究会、講演会、見学視察会に参加すること。
- (3) 会報の無料配布を受けること。
- (4) 収集した資料・情報を閲覧すること。
- (5) その他、当会が行う東京湾海堡への理解を深める活動

に参加すること。

第8条 (資格の喪失)

会員が次の各号に該当するときは、その資格を喪失する。

- (1) 退会したとき。

第9条 (役員)

当会は、役員として、会長1名、副会長1名、幹事(事務局長) 幹事(会計)を含め、15名以内の幹事をおく。

役員は会員から総会において選任する。役員任期は通常総会から次の通常総会までとするが、再任を妨げない。

第10条 (役員職務)

会長は、当会を代表し、その業務を総務する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。役員は役員会を組織し、当会の業務を行う。

第11条 (会計)

当会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第12条 (事務局)

当会の事務局事務所は、東京都台東区東上野 2-7-6 東上野 T.I ビル(株)地域開発研究所内におく。事務局には事務局員若干名をおく。事務局員は会長が選任する。

第13条 (付則)

当会則は、2003年6月21日から改定実施する。

役員

- 会長 高橋在久(東京湾学会理事長・江戸川大学名誉教授)
副会長 西田好孝(東京湾海堡建設従事者子孫代表)
幹事 仲野正美(横須賀市立衣笠小学校教頭)
幹事 安室真弓(東京湾学会理事)
幹事 小坂一夫(富津市文化財審議委員)
幹事 松本庄次(富津公民館長)
幹事 小沢洋(富津公民館主査)
幹事 鈴木元(富津湾の会会員)
幹事 朝倉光夫((株)ドラムエンジニアリング)
幹事 西田信吉((株)港建技術サービス)
幹事 長崎哲士(彫刻家)
幹事 勝 巖(新横商事(株))
幹事(事務局長) 島崎武雄((株)地域開発研究所)
幹事(会計) 高橋悦子((株)地域開発研究所)

皆さまからのお便りをお待ちしています。

「海堡」に投稿ください。葉書、手紙、E-mail、写真、ご意見、近況、作品、随筆など、事務局までお寄せ願います。

E-mail を事務局までご連絡ください。

見学会やシンポジウムの案内など、郵送より早くお知らせすることができます。

コラム

伴 宜 (ばん よろし) (1871 ~ 1935)

ふりがなを“ばんぎ”としている書籍¹がありますが、六女・永井百恵氏によると、“ばんよろし”が正しい呼び名です。

伴宜は、西田明則の後を受けて、東京湾海堡の建設に従事した陸軍の土木技術者です。『明治工業史』²によると、明治32年(1899)4月から明治40年(1907)11月までの間、伴が海堡建設の担当技師だったと記されています。伴は、この『明治工業史』の中の第9編「軍事土木」の著者です。また、米国国立公文書館で発見された資料「日本帝国海堡建築之方法及景況説明書」(日本から米国への海堡建設に関する技術提供資料)の著者でもあります。日頃から書くことが好きだった伴は、日記を高校生の時から欠かさずつけていましたが、戦災ですべて焼けてしまいました。もし残されていれば、海堡建設解明の貴重な資料になったと思います。

伴は、福井県出身で、福井藩儒・伴閑山の三男として生まれました。開成高校、一高、東京帝国大学へと進学したエリートで、スポーツも万能でした。体格がよく、一高時代は野球部、東大ではボート部で活躍しました。明治31年(1898)7月に東京帝国大学土木科を卒業しましたが、同級生には神戸港で日本最初の鉄筋コンクリートケーソンを設計・施工した森垣亀一郎がいます³。卒業後は陸軍の技師になり、佐世保支部付に配属された後⁴、翌年の4月から第三海堡の建設を担当しました。そして、明治44年(1911)1月から12月までの約1年間、欧州へ軍事土木の視察に行っています⁵。森垣と同級であること、欧州に視察に行っていることから、第三海堡に鉄筋コンクリートケーソンの施工を導入したのは伴ではないかと考えられています。

東京湾海堡建設を担当後、中国の青島や朝鮮の上下水道の敷設計画に携わり⁵、大正6年(1917)12月27日に陸軍を退官後、東京府の技師になります。東京府時代は道路関係の技術論文を発表しています。昭和10年(1935)12月14日に64才で亡くなる前日まで、日本鋼管など3社ほどの会社の顧問をして忙しく働いていました。一方で、暇をみつけては恵比寿のビリヤード場に通い、腕を磨いていたようです。

伴一家は昭和2年(1927)ころまで、新宿区早稲田にある夏目漱石の家の隣に住んでいましたので、伴家のお墓は新宿区早稲田鶴巻町の清源寺にあります。没後の昭和16年(1941)、山形県南陽市赤湯に水源地を探した伴宜の功績を讃えた石碑が建立されました。 【高橋悦子】

上記のエピソードは六女・永井百恵氏(水戸市在住)の話に基づいています。〔次回は高橋真八について紹介します。〕

¹ 手塚晃編：『幕末明治 海外渡航者総覧』1992.3.21

² (社)工学会：『明治工業史 土木編』1929.7.30

³ 東大土木同窓会：『東大土木同窓会名簿 2001-2002』2001.12.15

⁴ 内閣官報局『職員録』1899.4.29 (1899.2.1 現在の組織)

⁵ (社)日本水道協会：『日本水道史』1967.3.31

入会案内

東京湾海堡ファンクラブの活動主旨にご賛同いただける個人・法人(グループを含む)の入会を募集しております。

入会希望者は下記入会申込書にご記入のうえ、事務局までご送付願います。会費は下記口座にご送金ください。

東京湾海堡ファンクラブ入会申込書

入会申込み日	年 月 日
フリガナ氏名 (個人あるいはグループ名)	
勤務先 (法人会員の 方は連絡先)	会社名/ 部署名
	〒
	住所
	電話
	ファクシミリ
E-mail	
自宅	〒
	住所
	電話
	ファクシミリ
E-mail	
会報送付先	勤務先 自宅 (希望する方につけてください)
E-mailによる会報の送付 (E-mailでの会報の可否についてをつけてください)	E-mailでの会報の送付 (可 不可) (宛先: 勤務先 自宅)

銀行振込口座

東京都民銀行 御徒町(カマチ)支店 普通預金 4011598
「東京湾海堡ファンクラブ会計高橋悦子(トウキョウワンカイハウファンクラブカイケイタカハシエツコ)」
郵便局 00140-9-665909「東京湾海堡ファンクラブ」
会費(年間) 個人会員：2,000円 法人会員：10,000円

事務局 〒110-0015 台東区東上野 2-7-6 東上野 T.I ビル
(株)地域開発研究所内 東京湾海堡ファンクラブ事務局
事務局長：島崎武雄 会計：高橋悦子
電話 03-3831-2916 FAX 03-3836-4048
HomePage：http://www.babu.jp/~kaihoufc/
E-mail：kaihoufc@babu.jp

「海堡」 kaihou No.4

- 東京湾海堡ファンクラブニュース - 第4号

東京湾海堡ファンクラブ 2003年12月1日発行